

講演概要 アフガンに命の水を

PMS(ピースジャパン・メディカル・サービス)総院長 中村哲

ペシャワール会は1983年、パキスタン・ペシャワールでのハンセン病診療と共にスタートした。ハンセン病診療を柱としつつ、多い時には1つの基地病院と10カ所の診療所を運営してきた。しかし欧米軍の診療地域への侵攻や「反テロ戦争」による治安悪化で、現在では1カ所の診療所だけが機能している。私たちの診療活動を妨げたのは、欧米軍や治安悪化だった。更に2000年に顕在化した大旱魃による渇水、砂漠化がこれに追い討ちをかけた。旱魃で診療所のある村がまるごと難民化することもあった。診療所があっても水がないことには、村人の生存そのものが不可能な事態まで追いつめられていたのである。

飢えと渇きは薬では治せない。私たちは1600本の井戸を掘り、2003年からは農業用水路の建設を始めた。その25.5キロの用水路によって復興した田畑は3000ヘクタール。およそ15万人の生存を確保することができた。工事には連日500人ほどの作業員が従事したので、八年間でのべ100万人近くの雇用が発生したことになる。用水路工事が無ければ難民になるか、軍閥や欧米軍の傭兵になるしかない人々である。用水路工事が巧まらずして地域の治安安定に寄与したのである。総工費は約15億円、全て会員の会費と支援者の寄付による。

用水路事業は、主に日本の伝統工法を参考とした。「蛇籠工」や「柳枝工」という江戸期に完成した工法を、なぜ採用したのか。用水路は絶えず維持・改修せねばならない。コンクリート三面掩蔽水路だと土地の人々にとってその修復は、技術的・財政的にみて困難を伴うことになる。アフガン人は家を石と泥と日干しレンガで築き、子供も手伝う。男たちは生まれついて石積みの技術をもっている。彼らにとって蛇籠であればその修復・保全は難しいことではない。これに柳枝工を加えるとさらに強い水路になる。

この中でも、最大の貢献をしたのが取水技術だった。年々進行する気候変動は、洪水と渇水の極端な同居となり、アフガニスタンの従来方式では取水が難しくなっていた。これを解決したのが斜め堰、水制らの日本の治水技術で今後画期的な農村復興をもたらす可能性がある。

私たちは用水路を完工し、15万人の生存の基盤を確保した。イスラム教徒である農民たちの精神の拠り所であるモスクとマドラサを建設した。さらに用水路の最終地点であるガンベリ砂漠を開墾して「自立定着村」を建設している。ここには用水路の建設現場で治水技術を習得した作業員＝農民の家族が入植し、農業をやりつつ用水路の修復・保全を行うことが期待されている。

こうして私たちはアフガニスタンの1地域ではあるが、その復興支援モデルを提示できたのではないかと考えている。